



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号
TEL (082) 241-5246 (代表) FAX (082) 542-7941 E-mail: p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
平成26年(2014年)7月/年3回発行 [URL] http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

NPDI (軍縮・不拡散イニシアティブ) 広島外相会合の開催



市内の幼稚園児、小中学生と各国外相等との記念撮影

四月十一日、十二日に第八回NPDI(軍縮・不拡散イニシアティブ)外相会合が、初めて日本で広島市において開催されました。

NPDIは、日豪を中心とした非核兵器国十二か国(日本、オーストラリア、カナダ、チリ、ドイツ、メキシコ、オランダ、ナイジエリア、フィリピン、ポーランド、トルコ、アラブ首長国連邦)からなる軍縮・不拡散分野における地域横断的な有志国グループであり、二〇一〇年のNPT(核不拡散条約)再検討会議での合意事項を着実に履行するとともに、核軍縮・不拡散に関する創造的な政策を話し合うものです。

当会合の広島開催は、各国の外相たちに、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を願う広島市民の思いを伝えるまたとない機会であると考え、被爆者の体験や平和への思いを共有してもらうため地元主催による様々な関連行事を企画し、外相会合の日程に組み込んでいただきました。

核軍縮シンポジウム

初日の四月十一日には、「核兵器の非人道性と核兵器廃絶に向けた政府と市民社会の役割」をテーマに核軍縮シンポジウムを開催しました。

秋山信将^{あきまののぶまさ}一橋大学教授のコーディネート

目次

NPDI(軍縮・不拡散イニシアティブ)広島外相会合の開催	①～②	資料展 峠三吉と「われらの詩」/ 英語で伝えようヒロシマセミナー/ 被爆体験の継承にご協力を	⑧
NPT再検討会議準備委員会に合わせ平和首長会議		収蔵資料の紹介コーナー「消えた家族」/ 平和記念資料館の改修工事スタート	⑨
代表団がニューヨーク市を訪問	②～③	市民が海外文化を堪能(大邸の日、ハノーバーの日)/ 「ひろしま留学生基金」にご協力を	⑩
被爆体験記「[在日コリアンヒバクシャ]としてヒロシマを生きて」		日本語ボランティアのためのスキルアップ講座/ ボランティア通訳者研修会	⑪
(本財団被爆体験証言者 朴南珠)	④	解説「核兵器の非人道性—医学的エビデンスから」	⑫～⑮
平和記念資料館公開講座/ 平和首長会議の活動強化—アメリカ・メキシコ訪問	⑤	(広島原爆被爆者援護事業団 理事長 鎌田七男)	
平和首長会議の活動強化—マーシャル諸島訪問/ ヒロシマ・ピースフォーラム開講	⑥	海外からの来訪者が発信するメッセージ	⑯
広島・長崎講座現地学習支援/ 第14回「ヒロシマ・ガイド」	⑦		

各国外相と被爆者や市民等との意見交換会

核軍縮シンポジウムに続いて、岸田文雄外務大臣などの各国外相と被爆者やNGO、高校生平和大使、平和首長会議会長である松井市長や副会長である田上富久長崎市長等の参加による「各国外相と被爆者や市民等との意見交換会」を開催しました。

インターネットにより、各国政府代表や被爆者、NGO、広島市長、広島県知事等の様々な立場の出席者が核兵器の非人道性や廃絶に向けた道筋について議論しました。

松井一貫広島市長は、「核兵器は絶対悪であり、非人道性の極み。広島や長崎の被爆の実相を知ってもらいたい。」と訴えました。



パネル討論の様子

発言する松井市長

外務大臣・NPD外相会合支援推進協議会共催歓迎レセプション・ディナー

意見交換会の後、歓迎レセプション・ディナーを開催しました。広島に古くから伝わる伝統芸能である神楽を披露するなど、地元を挙げて歓迎するとともに、地元出席者と各国からの出席者が交流を深めました。

広島県原爆被害者団体協議会の坪井直理理事長が、「理性がなければ平和を実現できない。戦争は絶対いけない。」と訴えるなど、それぞれの参加者が立場や世代を超え意見を交わしました。



坪井県被団協理事長の発言を聞く出席者たち



志賀館長の説明を聞く外相たち

会合の前に、各国外相たちに平和記念公園を訪問していただき、原爆死没者慰霊碑への参拝・献花を行っていただきました。参道を通る際に市内の幼稚園児や市民等が各国国旗の小旗を振って歓迎活動



平和メッセージを読み上げる子どもたち



小倉さんの被爆体験証言を聴講する外相たち

二日間に渡る一連の関連行事を通じて、世界の政治指導者たちに広島を訪問していただくことは、平和への思いを共有していただく良い機会であると改めて確認することができ、また、二〇二〇年までの核兵器廃絶を願うメッセージ

を行うとともに、市内の小中学生が千羽鶴や英語で書いた平和メッセージを手渡しました。

続いて、志賀賢治館長の案内で各国外相たちに平和記念資料館を見学していただき、その後、被爆者の小倉桂子さんによる被爆体験証言を聴講していただきました。

小倉さんは、「子どもたちに同じ悲劇を体験させたくない。共に平和な世界を築きましょう。」と訴えました。

平和首長会議（会長 松井一貫広島市長）は、今年四月、アメリカ・ニューヨーク市で開催されたNPT（核不拡散条約）再検討会議第三回準備委員会に合わせて代表団を派遣しました。また、この度初めて「核廃絶！ヒロシマ・中高生による署名キャンペーン」の高校生八人が同行しました。

松井市長は、準備委員会のNGOセッションでスピーチし、各国政府関係者等に核兵器の非人道性と「核兵器禁止条約」の早期実現

NPT再検討会議準備委員会に合わせ平和首長会議代表団がニューヨーク市を訪問

を国内外に広く発信することができました。

関連行事後に行われた外相会合では、七か国の外務大臣及び国務大臣を含む各国代表が出席し、核軍縮や不拡散に関する話し合いが行われ、最後に、核保有国を含む世界の政治指導者に広島・長崎訪問を呼び掛けることや核兵器の究極的廃絶に向けた多国間交渉の提唱などの内容が盛り込まれた「広島宣言」が採択されました。

（平和連帯推進課）

に向けた取組の必要性を訴えるとともに、潘基文国連事務総長に同条約の早期実現に向け具体的交渉開始のリーダーシップをとっていただくよう求める要請文等を提出しました。また、関係行事に出席し、挨拶等を行うとともに、各国政府関係者等と面会し、核兵器廃絶に向けての一層の努力を要請するとともに、核軍縮に関する情勢についての意見交換等を行いました。

松井市長の主な用務は次のとおりです。

四月二十七日(日)

アメリカ同時多発テロの標的となった世界貿易センターの跡地であるグラウンド・ゼロで献花を行い、約三千人の犠牲者に哀悼の意を表しました。

四月二十八日(月)

「署名キャンペーン」の高校生とニューヨーク市立スタイベサント高校の生徒との交流会で挨拶し、広島の悲惨な被爆の実相を紹介するとともに、「絶対悪」である核兵器の廃絶を願う被爆者の心の底からの思いとヒロシマのメッセージに対する理解を促しました。また、この交流会を通じて核兵器のない平和な世界の実現に向けた意思を共有するとともに、互いの友情を育んでもらうようお願いしました。

続いて、潘国連事務総長と面会し、平和首長会議要請文及び市民署名約二十一万筆の目録を手渡した上で、「核兵器禁止条約」の早期実現に向けた具体的な交渉の開始を含め、一日も早い核兵器廃絶の実現に向けた機運が醸成されるよう尽力をお願いしました。併せて、来年被爆七十周年を迎える広島・長崎への訪問を要請しました。

また、アンゲラ・ケイン国連軍縮担当上級代表、ロマン・モレイ準備委員会議長、各国代表部の大使等が出席する国連日本政府代表部主催レセプションに出席しました。レセプションの挨拶の中で、「署名キャンペーン」の高校生が、被爆地の思いを世界に伝え、次代を担う若者として核兵器のない平和な世界の実現に取り組んでいきたいと決意表明し、参加者から大きな拍手を受けました。

四月二十九日(火)

「核兵器のない平和な世界を目指す」をテーマとする平和首長会議主催ユースフォーラムを開催しました。

最初に、松井市長は、被爆体験の風化が懸念されている中、若い人々を中心として多くの人々が被爆体験を受け継ぎ、世界に、そして将来世代に伝えていくことが重要であること、将来、核兵器廃

絶と世界恒久平和の実現に向けての運動をリードする存在になってもらいたい旨の挨拶を行いました。コーディネーターは平和首長会議事務総長の小溝泰義本財団理事長が務め、「署名キャンペーン」の高校生八人、ナガサキ・ユース代表団の大学生二人及び二〇二〇ビジョンキャンペーン協会でインターンをしている米国の大学生がそれぞれの平和活動や平和への思い、核兵器廃絶に向けた取組への決意等を発表しました。



NPT再検討会議第3回準備委員会NGOセッションへの出席

続いて、NPT再検討会議第三回準備委員会NGOセッションに出席し、松井市長は、田上長崎市長とともにスピーチを行いました。松井市長は、六十九年前の広島

の惨状をデータに基づき説明するとともに、被爆者のその後の人生について触れ、核兵器がいかに非人道的であり「絶対悪」であるかを強調しました。また、核兵器の非人道性に焦点を当てた国家レベルでの議論が進む中、平和首長会議の加盟都市とともに、国連やNGO等と連携して「核兵器禁止条約」の早期実現に全力を尽くしていくことを表明するとともに、アメリカのオバマ大統領の広島・長崎訪問を呼び掛けました。

四月三十日(水)

広島県主催の「広島

の経験

をテーマとするサイドイベントにおいてスピーチを行い、「二〇二〇ビジョン」具体化のための行動計画に基づく取組を説明し、広島市及び平和首長会議は、国境も世代も超えた幅広い市民社会の核兵器廃絶への願いの結集に全力で取り組むことを表明するとともに、「絶対悪」である核兵器の廃絶に向け共に行動してもらいたいと参加者に呼び掛けました。

また、本イベントに出席したアンゲラ・ケイン国連軍縮担当上級代表は、スピーチの中で平和首長会議の取組を高く評価するとともに、「署名キャンペーン」高校生の活動を好例として挙げ若い人たちの活動の重要性を強調しました。

続いて、NGO「ピースデポ」等主催の「北東アジア非核兵器地帯の設立へ、今、行動する時」をテーマとするフォーラムにおいてスピーチを行い、核兵器廃絶に向けたシステムのひとつとして非核兵器地帯の構築は重要な役割を担っていると述べました。

また、ジョージ・ロモナコメキシコ国連軍縮大使等各国政府関係者等に面会し、核兵器廃絶に向けての一層の努力を要請するとともに、核軍縮に関する情勢についての意見交換等を行いました。

(平和連帯推進課)



平和首長会議主催ユースフォーラムの開催



プロフィール
 [パク・ナムジュ]
 1932年広島市で生まれる。父母は韓国慶尚南道晋州市から渡日。原爆投下当日、弟妹二人と共に爆心地から1900m地点、路面電車の中で被爆。2003年から「証言活動」を続ける。また2005年から3年間、民団県本部婦人会長として、日韓交流など平和に関する活動に携わる。

被爆体験記

「在日コリアンヒバクシャ」として
 ヒロシマを生きて

本財団被爆体験証言者

朴 南珠

臣民として学徒動員・戦中の日々

私の父母は戦中に韓国から広島に来ましたが、暮らしは比較的裕福で小学校から女学校に進みました。小学校の時、太平洋

戦争が始まり、女学校の時には学徒動員で野菜を作ったり、建物疎開（火災被害を拡大させないための撤去作業）で勉強はできませんでした。鉛筆なども配給制となりましたが「勝つためには頑張る」と思っていました。

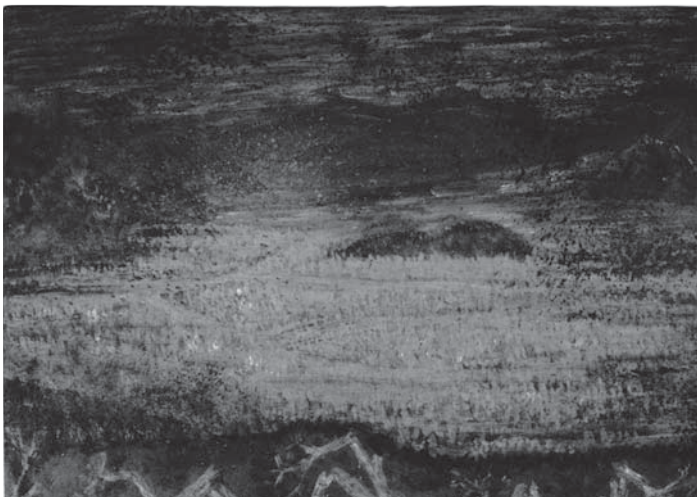
ハチロク運命の日

女学校に進学しましたが、八月六日当日は、たまたま軽い怪我のため休み、弟妹二人を連れ福島町から路面電車に乗っていました。

爆心地から一・九キロメートルあたりで、かすかにB29爆撃機の爆音が聞こえたと同時に、物凄い光と音、そして大きな火のかたまりが電車を包みこみましました。無我夢中で電車から飛び降り、気がつくと弟妹の手を握っていました。身体のあちこちから血が流れている人達のなかを家があった方向に歩き、土手

街が消えていました。爆心地近くから多くのひとが避難してきましたが、言葉では言えないようなむごい状態でした。父母も福島町で被爆しましたが帰ってきました。

そのうち真っ黒い、油のような雨が降り出しました。その中を近所の人と己斐の山に逃げました。夜になると広島市街地は空が焦げるかのように真っ赤に燃えていました。八月六日に学徒動員で出た近所の人は誰ひとり帰っては来ませんでした。



「市民が描いた原爆の絵」（作者：下村儀三氏）
 己斐の山より望む市内、燃える、燃える、火災地獄の広島（爆心地から約3km。昭和20年8月6日夜）

懸命に生きた戦後

「一夜明けると、周囲は本当に「惨状」という言葉では表現できないひどきでした。生きている人の傷口に蛆虫が湧いていた。また、腫れあがったり、眼の玉が飛び出している遺体を焼く作業が行われていました。子供たちも手伝いました。私も頭が化膿して「ベトベト」になりましたが、「痛さ」の記憶はありません。ただ「蛆虫が湧く」恐怖だけが鮮明に頭に残っています。

終戦を聞いて、あの恐ろしいB29の空襲がないことが、本当に嬉しかったです。何故か、戦後父が何時も「身体がだるい」と言っていて、働かなくなり、生活のためどんな仕事でもしました。後に分かった

ことでしたが、父は「肝臓癌」だったのです。
 次世代から触発・次世代への伝言
 私が証言活動を始めたのは、二〇〇二年五月、平和公園で偶然大阪の小学生三人から声をかけられ、体験を話したのがきっかけです。その子供が参観日に私の話を発表し、その感想を「お母さんのなかには涙するひらがいた」と書いたお礼の葉書を受け取ってからです。
 私は証言の度に子供たちに言います。「私も在日韓国人としていじめに逢わなかったことはありませんが、いじめよりもっと優しい愛情をたくさんいただいたので、いじめとか憎しみを忘れられる。本当にいじめよりも優しさ・愛情は大切なんだ」と。そして、原爆は「助けてくれ」と言う間もなく人を殺してしまう。戦争は人の殺し合いだから、勝っても負けても多くの人が死んだり傷つく、だから戦争は、そして「核」の使用は絶対してはいけない、このことを次の世代に伝えていきたいと思

平和記念資料館公開講座 「被爆体験証言者交流 の集い」研修会を開催

本財団が事務局を務める「被爆体験証言者交流の集い」では、被爆体験証言活動を行っている方だけでなく、広く市民の皆様へ、平和について学ぶ機会を提供するため、年二回、公開講座を開催しています。

平成二十五年度は第一回目を平成二十六年一月二十五日（土）に、第二回目を二月二十二日（土）に広島平和記念資料館メモリアルホールで開催しました。

第一回講座「第五福竜丸被災六十年 核なき世界をめざして」第五福竜丸は航海中」
講師 **安田和也・都立第五福竜丸展示館主任学芸員**

安田和也さんは、一九五四年三月一日にアメリカの水爆実験によりビキニ環礁で被爆した第五福竜丸について、乗組員の被害状況やその後の生活、また、マシーナル諸島住民の長く続く苦難や第五福竜丸の保存の動きなどを話されましました。そして「今後も第五福竜丸とともに事実を伝え、発信し、ヒ

ロシマ・ナガサキとともに核の問題に向き合っていきたい」と力強く語られました。

参加者からは「第五福竜丸を通じて、核兵器のない世界へ向かう考え方を広めることが大切だと思った」などの声が聞かれました。

第二回講座「平和とは何か だれのための平和、友好、そして援助なのか」
講師 **吉川元・広島市立大学広島平和研究所長**



第2回講師 吉川 元さん

吉川元さんは、戦争はなぜ発生するのか、どのようにすれば恒久平和が実現するのか、といったことについて、人間の安全保障の視点から、複眼的な平和の見立ての必要性や平和創造手法の問題点などについて幅広く解説されました。参加者からは「吉川さんの講演

で、新たな視点や考え方を与えてもらい、「平和」について改めて考え直すきっかけとなった」などの感想が寄せられました。
(平和記念資料館 啓発課)

平和首長会議の活動強化 アメリカ・メキシコ訪問

小溝泰義（こみぞやすし）平和首長会議事務総長（本財団理事長）は、今年二月、平和首長会議副会長都市へのリーダー都市就任要請や「第二回核兵器の人的影響に関する国際会議」への出席、国連との連携強化等を目的としてアメリカ及びメキシコを訪問しました。
小溝事務総長の主な用務は次のとおりです。

平和首長会議副会長都市へのリーダー都市就任要請

アメリカ・アクロン市長、メキシコ・メキシコシティ市長、「第二回核兵器の人的影響に関する国際会議」に出席したノルウェー・フロン市長に対し、リーダー都市への就任を要請しました。アクロン市長は就任を受諾、他の二人の市長からも前向きに検討するとの

回答を得ることができました。また、各市長と平和首長会議の今後の取組等について意見交換を行いました。

第二回核兵器の人的影響に関する国際会議への出席

この会議は、百四十六の国が参加し、メキシコで開催されました。小溝事務総長は、会議冒頭の被爆体験証言セッションにおいて意見発表を行い、被爆者への謝意と敬意を表した上で、被爆者の「あのような悲劇は誰にも繰り返させない」との止むに止まらない人間の深い心情から発する尊いメッセージを、まさに今の世界の人々が厳粛な気持ちで受け止めるべきであると訴えました。その上で、地球共同体という考え方が、新しい種類の信頼できる国際的安全



意見発表する小溝事務総長

保障を担保し、世界恒久平和の礎となる、との意見を表明しました。また、会議に参加していた各国政府やNGO関係者、核軍縮専門家、在外被爆証言者等と核兵器廃絶に向けた意見交換を行いました。

国連との連携強化

アンゲラ・ケイン国連軍縮担当上級代表と面会し、平和首長会議の現在の取組について説明を行うとともに、四月末のNPT再検討会議準備委員会に松井広島市長が出席する際、国連事務総長との面会への協力を要請しました。

ケイン上級代表は、広島・長崎両市が被爆体験を積極的に伝えていくことを高く評価して、これまでの国連との協力関係に満足の意味を表明しました。
(平和連帯推進課)



アンゲラ・ケイン国連軍縮担当上級代表と小溝事務総長

平和首長会議の活動強化 マーンシヤル 諸島訪問

小溝泰義平和首長会議事務総長（本財団理事長）は、松井広島市長の代理として、三月一日にマーンシヤル諸島共和国の首都マジュロ市にて開催された核犠牲者追悼記念日（通称：ビキニ・デー）公式式典に出席しました。

一九五四年三月一日にビキニ環礁で行われた米国の水爆実験から六十年を迎えるビキニ・デーの公式式典及び関連行事に出席することにより、核兵器廃絶と世界恒久平和を訴えるヒロシマのメッセージを発信するとともに、平和に取り組む人々との交流を図りました。

小溝事務総長の主な用務は次のとおりです。

二月二十七日（木）

ロヤック マーンシヤル諸島共和国大統領を表敬訪問し、ビキニ・デー公式行事でスピーチの機会を与えていただいたことへの謝辞を述べ、松井市長の親書を手交しました。ロヤック大統領からは、式典参加への感謝と、核被害を若い世代へ伝え、世界に発信することが重要であるとの



ロヤック大統領を表敬訪問（2月27日）

発言がありました。

二月二十八日（金）

ビキニ環礁での水爆実験で被ばくした第五福竜丸乗組員の生存者である大石又七氏とロンゲラップ環礁で被害に遭ったマーンシヤル諸島の被ばく者との対談を聴講しました。

三月一日（土）

核犠牲者追悼記念日公式式典でスピーチし、我々は、被爆者の尊く力強いメッセージを厳粛な気持ちで共有すべきであり、人道的な立場から核兵器の使用は二度と許すことは

できないと訴えました。そして、いかなる場所においても、これ以上の「ヒバクシヤ」を出さないように全力を尽くしていかねばならないと決意を述べました。

式典では、司会者から松井市長のメッセージの紹介もありました。

三月三日（日）

世界の被ばく者の証言映像をインターネットで発信し連携を呼びかける「グローバル・ヒバクシヤ・プロジェクト」に関する若者向けのワークショップで、核兵器のない世界の実現について講演しました。

また、第二次世界大戦中に太平洋諸島で戦没した人々の慰霊と恒久平和を願って日本政府が設置したマジュロ平和公園及び東太平洋戦没者記念碑を視察しました。

三月三日（月）

二歳の時に、ロンゲラップ諸島で被ばくした国会議員のジェバン・リ

クロイン氏の被ばく体験証言を聴講しました。その後、リクロイン氏と協議し、クワジエリン環礁の平和首長会議加盟を要請しました。

（平和連帯推進課）

ヒロシマ・ピース フォーラム開講

市民の方が平和や原爆について学び、どのように行動していけばよいかを探究する機会を提供するための連続講座、「ヒロシマ・ピースフォーラム」を、五月十日（土）に開講しました。広島市立大学との連携講座であることから、公募した一般参加者と広島市立大学の学生計百十三人が、七月十九日（土）までの隔週土曜日全六回の講座に参加します。

第一回の講座では、初めに広島市立大学広島平和研究所の水本副所長が「ヒロシマを学ぶ意義」と題して講演を行いました。水本副所長は、広島市の被爆体験を学ぶことを通じて、現代の私たちが知るべきことについて話しました。

続いて、広島大学原爆放射線医学研究所の稲葉所長が「放射線の人体影響について」と題して講演を行い、放射線の歴史からその人体面及び精神面での健康被害などについて

医学的な見地から話しました。

第二回以降、参加者は、原爆被害の実相や核兵器廃絶に向けた様々な取組等について、実体験・建築・芸術・国際協力といった多岐に渡る分野の講演を聴講し、グループでの意見交換を通じて理解を深めます。

（平和連帯推進課）



広島平和研究所の水本副所長



広島大学原爆放射線医学研究所の稲葉所長

広島・長崎講座 現地学習支援

広島市と長崎市では、被爆者のメッセージを人類共通の財産として、そこに込められた平和への「思い」を学問的に整理・体系化し、普遍性のある学問として若い世代に伝えるため、世界の大学での「広島・長崎講座」の開設・普及に取り組んでいます。

三月から五月にかけて、同講座を開設している米国・セントラルコネチカット州立大学とインディアナポリス大学の学生一行と、国際基督教大学の海外留学生がそれぞれに広島での現地学習を行いました。

三大学とも、平和記念公園や広島平和記念資料館の見学、被爆体験証言の聴講を通して被爆の実相を学びました。また、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、原爆を題材とした詩の朗読に耳を傾け、自らも詩を朗読する体験をしました。

セントラルコネチカット州立大学

三月十九日(水)と二十日(木)の二日間、米国・セントラルコネチカット州立大学の教員二人・学生二十二人の一行が、新人生向け研修の一環として現地学習を行いました。



原爆詩朗読会で朗読する米国・セントラルコネチカット州立大学の学生

同大学一行は、池田精子さんによる被爆体験証言を聴講するなどしました。

国際基督教大学

四月五日(土)から八日(火)には、国際基督教大学留学生一行十二人が現地学習を実施しました。

参加した留学生は、アメリカに本部を持つロータリー財団により世界



原爆の子の像に折り鶴を捧げる国際基督教大学の留学生

各国で選抜され、国際基督教大学の修士課程で平和研究を専攻している学生です。この取組による同大学の留学生の訪問は今回で九回目となります。

池田精子さんによる被爆体験証言を聴講したほか、小溝泰義本財団理事長や広島市立大学広島平和研究所の研究者とのディスカッションを行い、核兵器廃絶に向けて自分たちができることについて率直な意見を交わしました。

インディアナポリス大学

五月十日(土)から五月十四日(水)には、米国・インディアナポリス大学の教員二人・学生八人の一行が現地学習を実施しました。この現地学習は「広島・長崎講座」の認定講座である同大学の「ヒロシマ・ピース・スタディ」の一環です。同大学の現地学習は今回で四回目となります。一行は、日本文化に触れるとともに平和問題について学びました。

一行は、山本定男さんによる被爆体験証言の聴講や、鶴田マリ広島YMCA外語学院名誉院長による戦時中のアメリカ日系人収容所での体験などについての講義、広島平和研究所の水本副所長の講義、縮景園での被爆樹木の見学などを通して被爆の実相について理解を深めました。

また、今回は初の試みとして、広島城学芸員による中国軍管区司令部等を含む広島城構内の戦跡に関する



被爆体験証言者等と米国・インディアナポリス大学一行

解説を、広島経済大学の学生六人も交えて聴講し、広島市の学生との交流及び、かつての軍都広島市の歴史的側面などを学ぶ機会を持つことができました。

(平和連帯推進課)

観光事業従事者研修会 第十四回「ヒロシマ・ガイド」を開催

本財団は、三月七日(金)に第十四回「ヒロシマ・ガイド」を開催しました。

これは、広島への来訪者に被爆の実相や核兵器廃絶と世界恒久平和を願う「ヒロシマの心」を正しく、分かりやすく伝えてもらうため、日頃から広島平和記念資料館や平和記念公園などを案内するバスガイドや観

光タクシードライバー等観光事業従事者の方を対象にした研修会で、広島県内外の十団体四十六人の参加がありました。この研修会は、平成十三年度から開催し、今回で十四回目となります。

参加者は、グループ毎に広島平和記念資料館内及び平和記念公園を回りながら、同行のヒロシマピースボランティアから展示物や慰霊碑等の解説を受けました。

続いて、広島平和記念資料館及び国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の職員から、各館が行う事業等の概要説明を受けました。

終了後、参加者からは「詳しくかつ分かりやすい説明で大変勉強になった」、「平和記念公園の来訪者になったら」と説明ができるよう、この研修で学んだことを活かしたいと思うなどの感想が寄せられました。

(平和記念資料館 啓発課)



ヒロシマピース ボランティアから、平和記念公園の慰霊碑等の解説を受ける研修会参加者

資料展

「われらの詩」を開催

平和記念資料館では、峠三吉氏に
関連した資料展を、平成二十六年三月十四日から四月十四日まで当館東館地下一階で開催しました。

今年一月に、広島市に御寄贈いただいた「われらの詩」(全巻)を紹介する資料展を開催しました。「われらの詩」は、「原爆詩人」として知られる峠三吉氏が中心となって、広島で発行していた詩のサークル誌で、昭和二十四年三月に創刊され、昭和二十八年の第二十九号まで発行されました。「われらの



昭和30年5月メーデーの行進に参加した「われらの詩」の主要メンバー。前列右端が峠三吉氏。(増岡頼子氏提供)

の原点がここに
あります。例え
ば、女優の吉永
小百合さんが朗
読している「ヒ
ロシマの空」(林
幸子作)は「わ
れらの詩」第十
号に発表されま
した。

今回の資料展
では、「われらの
詩」の全作品リ
スト等を展示し
ました。来場し
た「われらの詩」
メンバーからは
「自分や知人の名前があり、当時を
思い出し、感慨深い」等の感想が
寄せられました。
(平和記念資料館 啓発課)

英語で伝えよう ヒロシマセミナー

平和記念資料館では、原爆被害に
関する基礎知識を英語で伝える方法
について学ぶ「英語で伝えようヒロ
シマセミナー」を実施しています。

五月二十五日(日)に実施した今

年度の第一回「一般の部」には、海
外渡航の予定や、ホームステイなど
で外国人を受け入れる機会のある方、
また、日頃から英語で原爆被害につ
いてどのように伝えたら良いか学習
したいと考えておられた方など、計
七十四人が参加しました。

前半部分では、米国出身の英語教
員クレイグ・ネヴィットさんが、原
爆被害の概要について英語で説明し
た後、外国人から寄せられる質問に

英語で簡潔に答える方法を説明しま
した。

後半部分では、国連訓練調査研究
所(ユニタール)広島事務所スペシ
ヤリストのベリン・マッケンジーさ
んが、「ユニタールとひろしま」と題
し、中四国唯一の国連機関である同
事務所の役割や現在行っているアフ
ガニスタン奨学プロジェクト等につ
いて講演しました。

また、六月には、留学予定の高校



UNITAR広島事務所の活動について聞き入る参加者



原爆被害を英語で伝える方法について、ネヴィット氏(右)の説明に熱心に耳を傾け、メモを取る参加者

生を対象に同セミナーの「高校生の
部」を実施し、約百人の学生に向け、
原爆被害の概要と英語での説明の仕
方について学びました。
セミナーの参加者からは「知識が
深まってよかった。」「英語でプレゼ
ンする練習ができてよかった。」とい
った感想が寄せられました。
(平和記念資料館 啓発課)

被爆体験の継承にご協力を 被爆資料、原爆死没者のお名前・遺影(写真)、 被爆体験記をお寄せください

平和記念資料館では、原爆被害
の実相を伝えるための貴重な資料
として、被爆者やその遺族が保存
されている被爆の遺品や被爆の痕
跡をどよめる資料、写真等の収集・
保管に努めています。平成二十五
年度は、新たに四十八人の方から
一〇〇三点の寄贈がありました。

戦後七十年近くが経過し、遺
品や資料にまつわる詳細な情報の
収集が次第に困難になっています。
資料館では、核兵器廃絶のため、
原爆がもたらしたさまざまな被害
を将来にわたり伝えます。資料の
寄贈について、ご協力いただきま
すよう、よろしくお願いたします。

国立広島原爆死没者追悼平和祈
念館では、原爆死没者のお名前と
遺影(写真)、被爆体験記を収集・
公開し、被爆者の「ことごとこと
ば」によって、原爆被害の実相を
伝え、平和を訴えています。

原爆死没者が平成二十五年八月
六日現在で二十八万六千八百八十
八人であることに對し、原爆死没者
のお名前と遺影(写真)を当館に
お寄せいただいている数は、平成
二十五年度末で、二万人未滿に

「収蔵資料の紹介」コーナー 今回のテーマは 「消えた家族」

「収蔵資料の紹介」コーナーでは、平和記念資料館が収蔵している約二万一千点の資料の中からテーマに沿って、数点ずつ展示しています。

一九四五年（昭和二十年）八月六日、一発の原子爆弾が投下されました。強烈な閃光に貫かれ、広島のみならず、家も、人も、何もかもが一瞬にして消滅してしまいました。遺骨はおろか遺品さえ残らない人は数知れず、一家で全滅した家族もたくさんあります。

今回は、原爆で消えてしまった六つの家族の形見の品々を紹介しています。みんなで使っていた湯飲み、部屋に飾っていた一輪さし、玄関の表札、修理を頼まれていた時計…。あの日まではいつもと変わらない暮らしがあり、希望の未来がありました。

展示場所

平和記念資料館東館三階ミュージアムショップ前

展示期間

平成二十六年四月十日（木）～

平成二十六年八月三十一日（日）
（予定）
展示資料
実物資料十九点、写真十枚



鈴木六郎さんが撮影した家族の写真。六郎さんの一家は原爆で全滅しました。

平和記念資料館の 改修工事スタート

平和記念資料館では、建物の老朽化が進む本館を保存整備するとともに、戦争体験のない世代が多くなるよう現在の被爆の実相をよりわかりやすく正確に伝えることができるよう常設展示を全面的に更新する整備を進めています。

本年三月、東館の改修工事が始まりました。まず、東館地下一階の工事を行っています。これは、エスカレーターを新設し、三階を展示室とするため、現在三階にある事務室を地下一階へ移転するものです。

東館一階から三階の展示室は、九月一日から工事に着手する予定です。東館の展示室を閉室している間は、本館に東館の展示内容を仮設展示します。新しい東館の展示は、二〇一六年（平成二十八年）からご覧いただくことができます。

一方、本館の改修工事は東館をリニューアルした後、二〇一六年（平成二十八年）、二〇一七年（平成二十九年）を予定しています。東館、本館の二館を同時に観覧で

きるグランドオープンは二〇一八年（平成三十年）の予定です。
（平和記念資料館学芸課）

平和記念資料館の展示室の改修スケジュール（予定）

区分	平成26年 2014年	平成27年 2015年	平成28年 2016年	平成29年 2017年	平成30年 2018年
東館	リニューアル前の展示	改修工事（閉館）	リニューアル後の展示 閉館した本館展示の一部を仮設展示		グランドオープン
本館	8月31日（日）まで両館をご覧いただけます	リニューアル前の展示 閉館した東館展示の一部を仮設展示	改修工事（閉館）		



国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の体験記閲覧室

とどまっています。原爆で多くの人々が亡くなった事実を伝えるため、ご協力をお願いいたします。

また、被爆体験記とは、ご本人が自身について執筆されたもののみならず、広島と長崎の被爆者の方が書かれた被爆体験に関する手記・日記・書簡、被爆者の遺族・友人が書かれた追悼記を含みます。

お寄せいただいたお名前と遺影（写真）、被爆体験記等は永久保存するとともに、当館で公開し、後世に伝えさせていただきます。

【お問い合わせ】

■被爆資料について — 平和記念資料館学芸課まで

☎（082）241・4004

■氏名・遺影、体験記について — 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館まで

☎（082）543・6971

「姉妹友好都市の日」記念イベント 市民が海外 文化を堪能

広島市は、海外に六ある姉妹・友好都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を設けて記念イベントを開催しています。イベントの進行役は公募等で選ばれたヒロシマ・メッセンジャーの方が務めました。

大邱の日

五月三日（土）から五日（月）まで、ひろしまフラーワーフェスティバル会場で「大邱の日」記念イベントを開催しました。

主催―「平成二十六年度大邱の日実行委員会」（全十八団体）
三日（土）は、記念セレモニーを行い、ステージでは大邱の日実行委員長、広島市長、駐広島大韓民国総領事館総領事が挨拶され、大邱韓日協会会長により大邱広域市長メッセージが代読されました。文化・芸術の紹介では、北九州市小倉の韓国伝統学院の李院長によるカヤグム（韓国琴）演奏と扇の舞、在日



李院長によるカヤグム(韓国琴)の演奏

本大韓民国青年会広島本部によるサムルノリ（伝統楽器を用いた韓国の農楽舞）の演奏と踊りを行い、来場者を魅了しました。

また、三日間を通じ、「韓国・大邱マダン（ひろば）」を設け、「大邱広域市観光紹介」、「韓服（チマチョゴリ）を着て記念撮影」、「自分の名前をハンゲルで書いてみよう」、「韓国家庭料理の販売」各コーナーは、家族連れや若い女性を中心に多くの方で賑わい、韓国の文化を堪能していました。

期間中、約九千人の来場者があり、催しは大変盛況のうちに終わりました。

ハノーバーの日

五月二十五日（日）、広島市留学生会館で「ハノーバーの日」記念イベントを開催しました。

主催―「平成二十六年度ハノーバーの日実行委員会」（広島ハノーバー友好協会や本財団など十二団体で構成）

ハノーバーと交流の深い上田宗箇流茶道の体験、本場ドイツ製のソーセージとドイツパンの試食、バウムクーヘンの試食、ルツェラーゲ（二つのグラスに異なる酒等を注ぎ、一気に飲み干す。）を行いました。

またホールでは、セレモニーの後、ドイツ出身の渡邊カイさんによるハノーバーの街の紹介と、広島ハノーバー友好協会



ドイツ料理試食の様子

井内康輝会長によるハノーバーでの交流活動の報告を行いました。その後「ドイツ音楽コンサート」では、三組のプロの音楽家が、ドイツにゆかりのある音楽を中心に素晴らしい演奏を披露しました。最後に来場者全員で「野ばら」を合唱し、会場が一体となって終了しました。

このほか、ドイツ・ハノーバーの紹介展示では、ハノーバーからやってきた七人乗り自転車「カンファレンスバイク」の展

示や、広島市とハノーバー市の交流の歴史に関するパネル展示、ハノーバー電車のペーパークラフト体験、ドイツ絵本の紹介・読み聞かせを行い、各コーナーとも大好評でした。
約三百二十人の来場者があり、多彩なプログラムを通じ、楽しくハノーバーやドイツへの理解を深めていきました。
（国際交流・協力課）

「ひろしま留学生 基金」にご協力を

本財団では外国人私費留学生支援のため、皆様から寄せられた寄附金を「ひろしま留学生基金」として積み立て、その利息により「ひろしま奨学金」を支給しています。しかし、昨今の金利低下により、財源は大変厳しい状態となっています。「ひろしま留学生基金」への皆様の温かいご支援をお待ちしております。

基金へのご寄附に関するお問い合わせは
（公財）広島平和文化センター
国際部国際交流・協力課
☎730-0811

広島市中区中島町一番五号
（広島国際会議場三階）
☎（082）242-8879

「ひろしま奨学金」とは

広島市内の大学・大学院に在学し、かつ広島市内に居住する外国人私費留学生を対象に、昭和六十三年六月から毎年、約三十人に月額三万円を支給しています。

「日本語ボランティアのためのスキルアップ講座」の開催

広島市内では、約二十の外国人市民のための日本語教室が、ボランティアグループにより運営されています。これらの日本語教室を支援し、教室間のネットワークを強化する目的で、研修会を全三回開催しました。

一月二十六日(日)、第一回目では、広島国際学院大学教授の伊藤泰郎(いとうたけらう)さんに「広島市外国人市民生活・意識実態調査」から見た現状と課題について講義していただきました。調査結果の数値から見えてくる厳しい現状を示していただき、また調査の自由回答欄に書かれた外国人市民の悩みや意見を紹介していただきました。参加者からは、「実態を知って驚いた」「具体的な悩みがわかってよかった」などの感想が寄せられました。

二月十六日(日)、第三回目では、公益財団法人ひろしま国際センター日本語常勤講師の犬飼康弘(いぬかみやすひろ)さんの指導のもと、「新たなアクションを起こす！」をテーマ

について講義していただきました。ドキュメンタリードラマ「基町アパート」の映像や基町小学校での実際のエピソードを紹介していただき、日本語指導に加えて必要なサポートについて教えていただきました。参加者からは、「日本語指導力のほか、相手とつながる力も大切だということを学んだ」「日本語ボランティアの大切さを感じた」などの感想が寄せられました。



日本語学習の現状について学ぶ参加者

に、ボランティアグループがもつ共通課題について意見交換を行い、課題解決のためのアクションについて考えるワークショップを行いました。参加者からは、「しっかり話し合いができてよかった」「いろいろな人の話を聞くことができてよかった」などの感想が寄せられました。

全三回の研修会で、延べ六十三人の参加者からは「今後に生かしたい」との感想が多く寄せられ、日本語指導や日本語教室の役割について学ぶ機会となりました。また、参加者同士の交流の機会となったことで教室間の横のつながりの強化になりました。

(国際交流・協力課)

「ボランティア通訳者研修会」の開催

当財団では、平成十九年度より、行政機関の窓口や学校等に、当財団に登録しているボランティア通訳者を派遣し、日本語での会話が困難な外国人市民への支援を行っています。そこで、多岐に渡

る通訳に対応する人材を育成するため、登録者や一般市民を対象に、多文化共生の知識や語学能力の向上等を目的とした研修会を、全五回開催しました。

第一回目、三月一日(土)には、当財団の担当者がボランティア通訳者派遣制度の概略について、また、広島市の担当者が多文化共生の取り組みと現状や課題について説明しました。その後、外国人市民生活相談コーナーの担当者と相談員が、相談内容の事例や体験談を話しました。

続いて第二回目、三月八日(土)には、(財)自治体国際化協会地域国際化推進アドバイザーの村松紀子(むらまつのりこ)さんが、通訳ボランティアの役割やマナー、コミュニケーションの必要性などについて、自身の体験談を交え、データや映像を使用して解りやすく講義しました。

第三回目、三月十五日(土)には、平和のためのヒロシマ通訳者グループ(HIP)により、実際に英語で平和記念公園を案内する場面を想定したフィールドワークを、三つのグループに分れて行いました。

第四回目、三月二十一日(金)と第五回目、三月二十二日(土)

には、専門の通訳者を講師に招き、英語と中国語とポルトガル語のグループに分かれ、語学習得の有効な方法、ロールプレイング、ボランティア通訳派遣事例に沿った講義などの語学研修を行いました。

全五回の研修会には、延べ二百六十八人の参加者があり、「相談員の体験談により、両者の文化の違いや習慣も分かった上での通訳が必要だと感じた」、「語学能力だけでなく、基本的な準備や自己管理など、通訳者としてのポイントを知ることができた」、「語学研修は、今後の自分の学習方法がよく分かり、日々の学習の刺激になった」などの感想が寄せられ、今後の活動に役立つ研修会となりました。

(国際交流・協力課)



平和記念公園フィールドワークの様子

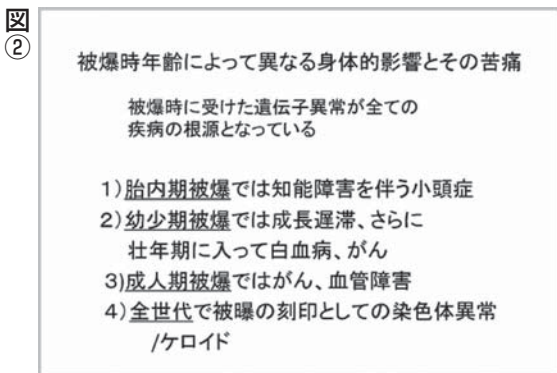
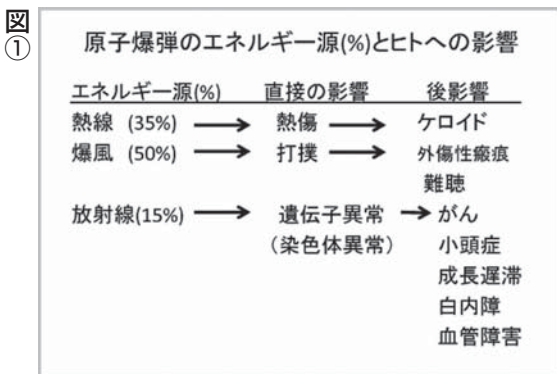


プロフィール
 [かまだ ななお]
 公益財団法人 広島原爆被爆者
 援護事業団 理事長。
 1937年生まれ。医学博士。広島大
 学名誉教授。日本放射線影響学
 会名誉会員、広島県がん対策推
 進協議会委員、核戦争防止国際
 医師会議日本支部理事。中国文
 化賞、永井隆 平和賞、日本対
 がん協会賞。2001年4月より現職。
 著書:「広島のおばあちゃん」など。

核兵器の非人道性 —医学的エビデンスから

(公財) 広島原爆被爆者援護事業団 理事長

鎌田 七男



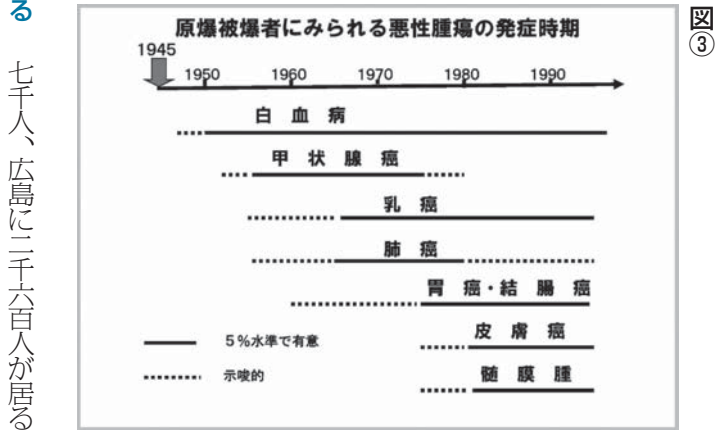
図①は、原子爆弾のエネルギー源とその影響を整理した図表である。熱線(35%)は熱傷を、爆風(50%)は打撲や外傷性癍痕、難聴を、放射線(15%)は遺伝子異常(染色体異常)を通じてがん、小頭症、成長遅滞、白内障、血管障害を引き起こす。図②は、被爆時年齢によって異なる身体的影響とその苦痛を示している。胎内期被爆では知能障害を伴う小頭症、幼少期被爆では成長遅滞、さらに壮年期に入ってから白血病、がん、成人期被爆ではがん、血管障害、全世代で被曝の刻印としての染色体異常/ケロイドが引き起こされる。

はじめに
 「核兵器の人道的影響に関する会議」は第一回が二〇一三年三月にノルウェーにおいて、また、第二回が本年二月にメキシコにおいて開催された。三年前にジュネーブの国際赤十字連盟から核兵器の非人道性の問題が投げかけられ議論され始めた。広島、長崎の人達は「何を今さら」という感覚があるだろうが、これは世界の人達からみれば、広島や長崎の名前は知っているけれども広島・長崎で何が起ったか、特に、核兵器の非人道性について、まだ充分に知られていないというこの証左であると考え

られる。
 本稿では、核兵器使用が非人道性であるという証拠を医学的エビデンスから記述し、次いで、一人ひとりの原爆被爆者の生涯から見えてくる非人道性について述べる。

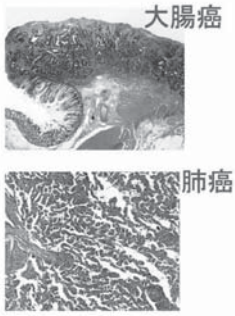
一. 原爆エネルギー源ごとに異なる病気の種類
 原子爆弾のエネルギー源とヒトへの影響を図①に示す。原爆エネルギーの五〇％は爆風であり、当時、打撲や裂傷などの直接的な被害を与えた。エネルギーの三五％は熱線で、後影響としてケロイド症状が出た。残り

の一五％は放射線で、これがヒトの遺伝子に傷をつけ、後障害としてがん、小頭症、成長遅滞、白内障、血管障害などを生じせしめた。一九四五年三月十日に東京大空襲があり、広島と同様に約十万人余の死亡者を出したが、広島爆弾では放射線が含まれていたため、十年、五十年、六十年後でも身体的・精神的苦痛となり被爆者を悩ませており、これが非人道性の根源といえる。

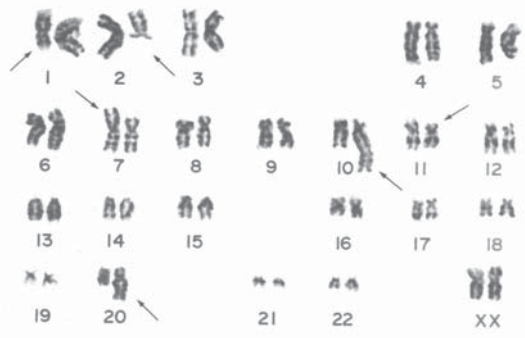


④ 多重がん
1年以内に2つのがんになる人もいる

被爆時年齢 22才
 被爆場所 芸備銀行 (280m地点)
 被曝線量 1200mSv
第1癌 H16年8月 大腸癌
第2癌 H17年7月 肺癌
 10月 腸閉塞




⑤ 被爆者(推定被曝3,000mSv)の染色体異常



⑥ 被爆者の記憶に残っている映像(PTSD)
 これまでに2回、被爆者から記憶に残っているシーンの絵画募集がおこなわれた

第1回目:被爆30年後、2,225の絵が集まった
 第2回目:被爆57年目、1,338の絵が集まった



小川紗賀己氏(広島平和記念資料館提供) 向井健二郎氏(広島平和記念資料館提供)

きた時期を示す。点線は統計的に有意性があるかもしれない(示唆的)ことを示し、実線は有意性の認められた時期を示している。甲状腺がん、乳がん、肺がん、胃がん、結腸がんなどに続いて皮膚がん、髄膜腫(脳腫瘍の一種)が増えた。一九九五年頃より二つ目のがんを発症する被爆者が増え始めた。図④に示すように大線量被爆者では被爆後五十九年目に大腸がんになり、その翌年に肺がん罹患するという経緯を持つ被爆者も多く見られて

いる。
被爆時年齢と係わりなく、被曝の刻印と見做されるものに染色体異常とケロイドがある。被爆者のリンパ球を二日間培養し、最低百個の分裂像を解析し染色体異常率を算出する。この染色体異常率から当時の被曝線量を推定することができる。染色体異常は爆心地からの距離が短いほど多くみられる。図⑤は日本銀行で被爆した人にみられた染色体異常で三〇〇〇ミリシーベ

ルト被爆と推定された例である。染色体異常は長期間持続しているため三十年、五十年経ってもその異常を把握することができ。リンパ球(T細胞、B細胞)、骨髄細胞、ケロイド部の皮膚細胞で染色体異常が証明可能であった。重要なことは各組織の幹細胞に放射線の傷がついており、これが分裂後の娘細胞にも受け継がれていくことである。ケロイドが後障害として困難なことは、腕関節や足関節の拘縮をきたし、本来の運動機能が不能に

なることと、顔や腕などの露出部に位置している場合、精神的に大きな負荷をかけたことである。当時の外科医は機能回復や成形に懸命に努力された。

三. 精神的苦痛
 被爆者への精神的苦痛として以下の四点を挙げることができ

一、後悔と罪の意識―助けを求め生徒や肉親を置き去りにして自分だけが生き残ったという罪の意識。あとき助けられなかったこと、顔や腕などの露出部になかったという後悔。当然、被爆当時は人を助けられる状態ではなかった。これがお詫びと償いの気持ちに変わってきた。

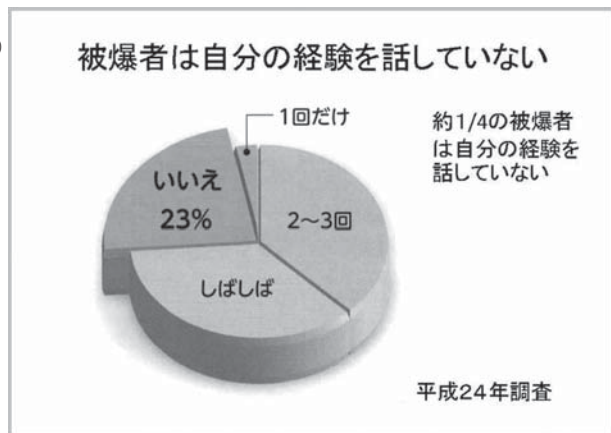
二、限らない不安―原爆症で亡くなっていく人を見て、いずれは自分にも同じ結末が来るのでは、という不安。

三、あの場面からの逃避―地獄絵を見た人が、二度と同じような状況に遭遇したくないという気持ちから心に壁をつくってしまう。この壁を守ろうとして、雷などの強い光、大きな音に対して拒絶反応を起す。

四、死者への尊敬と畏敬の念―被爆者は犠牲者に対して自分の身代わりで亡くなったと受け止め、尊敬と畏敬の念を持っている。手厚く弔うのがせめてもの罪滅ぼしだという気持ちが強い。

広島市とNHKは記憶に残るシーンを被爆者から募った。一回目は被爆三十年後で、二千二百二十五枚の絵が集まった。二回目は五十七年後で、千三百三十八枚の絵が集まった(図⑥)。たとえば左側の絵は、火が迫ってきた時にたぐさんの人が防火用水に入り込んだところ

図⑦



被爆者の比率が高いといえ

合わせる約五〇％であり、夫婦生活者の比率も高くなっているが、一人暮らしと合わせると七五％だった(二〇一二年調査)。最近では非被爆者の一般高齢者夫

が続き。

現在の被爆者の生活状況は、一人暮らしが四分の一、配偶者と二人暮らしと合わせると七五％だった(二〇一二年調査)。最近では非被爆者の一般高齢者夫

図⑦は二〇一二年十一月、県内のある地区で約九百名へのアンケートの結果を示す。被爆者の七七％は自分の被爆体験を少なくとも一回は子供に話をしてきた。一方で、「二度も話をし

で、その外側で亡くなった人もい

いない」被爆者は二三％にのぼり、「隠し続けている」「あまり言いたくない」「思い出さくなく

四. 社会的な苦痛

被爆者の多くは財産を完全に失くし貧困への道をたどった。突

然の家族の喪失。原爆孤児そして原爆孤老へ。体が弱いため就職が困難であった。一時期、企業が被爆者を雇わなくなった。何回も休みをとられると仕事上ま

五. 人生に投影された非人道性

これまで原爆被爆者の被害を項目別に述べて来たが、以後、被爆者の生涯からみた原爆の非人道性について述べる。

一、H・Oさんの被爆後の生涯(図⑧)

H・Oさんは八歳時、爆心地から四六〇メートル、小学校地下室にて被爆。奇跡的に助かった。被曝線量は染色体解析より一九六〇ミリシーベルトと推定

やっとな結婚生活を送れるようになったが、一九九一年に胃がんのため二回の手術を受け、胃は完全に摘出された。食道と腸を直接つなぐため、逆流性食道炎と貧血が続いた。一九九八年、長男の事故死があり、さらに二〇〇一年には初孫(次男の長女)が白血病になった。ところが、長女(孫)の病状について次男は親(H・O)に話さなかった。次男は被爆歴

図⑧

人生に投影された原爆の非人道性-1

H.Oさん(被爆時8才)の生涯

被爆地点: 爆心地より460m、地下室

被曝線量: 1,960mSv

生活歴		病歴	
1946	家族6名爆死、原爆孤児		
1947	似島学園生活		
1957	清掃員として就職		
1967	結婚	1991	胃がん
1998	長男の事故死		
2001	初孫の白血病死	2005	間質性肺炎
		2007	自殺

をもつ父親の心を痛めるのではないかと考え話をしなかった。父親は孫の病状を知りたかったが、直接次男に尋ねることはしなかった。親子で互いにかばい合い、また、葛藤もあつた。孫は骨髄移植も行われたが死亡した。その後、H・Oさんは二〇〇五年に間質性肺炎を患った。大量の放射線被爆によるかどうかは不明であるが、通常の鎮咳剤、ステロイド剤では改善されず苦しんでいた。そんな矢先、二〇〇三年に自宅で自分の命を絶った。

図⑨

人生に投影された原爆の非人道性-2

A.Iさん(被爆時17才)の生涯

被爆地点: 爆心地より730m、電車内

被曝線量: 2,650mSv

生活歴		病歴	
1945	家族2名爆死		
1946	中学校教諭		
1951	結婚	1971	原爆白内障
1973	原爆症訴訟		
1983	議員活動	1997	喉頭がん
		2002	皮膚がん
		2003	嚥下性肺炎死

A・Iさんは十七歳時、爆心地から七三〇メートルの電車内で兄と共に被爆した。兄は一週間後に死亡した。推定被曝線量は二六五〇ミリシーベルトであった。六人家族のうち二人が原爆関連死した。

一九七一年に原爆白内障に罹患、一九九七年に喉頭がんになり、一年半放射線治療を受け回復した。二〇〇二年右肩部分に皮膚がん出現。その翌年、頑固な皮膚筋炎となった。二〇〇三年に嚥下性肺炎を罹患し七十五歳で亡くなった。

A・Iさんは「世界の人は『広島』と言う言葉は知っているが、

図⑩

人生に投影された原爆の非人道性-3
K.Iさん(被爆時11才)の生涯
 被爆地点: 爆心地より410m、校舎内
 被曝線量: 4,830mSv

生活歴	病歴
1945 家族3名爆死	
1946 原爆孤児	
1953 結婚	
1965 離婚	
1966 再婚	1973 原爆白内障
	1985 甲状腺がん
	1996 大腸がん
	2001 髄膜腫
	2008 多発性神経鞘腫
1997 破産	

広島で何が起きているか知らない」と言い、被爆の実態を世界に知らしめないといけないと一生懸命言っておられた。

三、K・Iさんの被爆後の生涯(図⑩)

K・Iさんは十一歳時、爆心地から四一〇メートル、小学校一階校舎内で被爆。奇跡的に助かった。被曝線量は染色体解析より四八三〇ミリシーベルトと推定された。四人家族のうち自分を除く三人が爆死した。

生活歴では、原爆孤児になり、一時住込みで働いていたが、一九五三年十九才で結婚し妊娠

したが早産と自然流産を繰り返した。一九六五年離婚、一九六六年再婚、一九九七年破産を経験した。友達の連帯保証人にご主人がなったことで返済を迫られる状況になり、市営住宅にもいられず車上生活になった。キリスト教会のお世話で生活を立て直すことが出来た。

病歴では、一九七三年の精密検査時、難聴や原爆白内障が分かり、一九八五年甲状腺がん手術、拘束型肺障害、一九九六年大腸がん手術、二〇〇一年髄膜腫手術、二〇〇八年多発性神経鞘腫に罹った。神経鞘腫は帯状疱疹のようにピリピリと痛み、麻薬

処方が必要となった。現在も同じ状況である。

原爆被爆が生活の面でも、体調の面でも被爆者の人生を大きく狂わせ、連綿とした苦しみを与え続けていることが明白である。上記は多くの苦しんでいる原爆被爆者の中の三例を例示したにすぎないことを強調したい。

六、勇気づけられる被爆者の一言

著者は一九六二年、医学部卒業後、新設された広島大学病院

「被爆内科」に入局以来五十二年間、原爆被爆者と共に歩んできた。被爆者との会話の中に科学的研究のヒントや研究展開の糸口があった。ここでは被爆者が何となく発した言葉の中に、その人の苦勞の結晶、これまでの苦勞を超越した心境、人としての生き方などが含まれており、その幾つかを紹介する(図⑪)。

「主人の居ない人生はつらいね」と言ったのは、被爆で夫を亡くして以来、ひとり暮らしだった女性であった。その言葉はこれまでの苦勞の一部を吐露しており、いろいろと思いを馳せざるを得ず、とても重い言葉である。

「自分の思いをプラスにしたら幸せになれる」と言った方は、極貧を経験し、また、二つのがんに打ち克った方であった。この方は昭和二十年代にどのような生活したかを話してくれていなかった。再婚していた。六年前に娘さん二人を連れて原爆養護ホーム倉掛のぞみ園に来園された時、一目見てその理由が分かった。長女は日本人の顔ではなかった。今は孫も居て、とても良い境遇になられた。その人が「泥沼をはって歩いた八十路(やそじ)かな」と詠んだ手紙を先日下さった。とても前向きに考えておられる方である。

図⑪

被爆者の一言

- * “主人の居ない人生はつらいね”
被爆以来一人暮らしの方
- * “自分の思いをプラスにしたら幸せになれる”
貧困と2つの癌を経験した方
- * “苦悩を超えて生きてゆきます”
顔面やけど、3つの癌を経験した方
- * “思いやりの心が大切”
被爆と淡路大震災を経験した方

恨みの言葉は被爆者にはない

けられる思いである。被爆者は本当にいろんなことを教えてくれている。

「苦悩を超えて生きてゆきます」と言った女性は顔面全体にケロイドを持っていたが、四十過ぎて結婚され、子どもさんが一人いる。三つのがんを克服し、「生きていきます」と力強く言っておられる。

「思いやりの心が大切」と言われた方は原爆被爆と阪神淡路大震災の両方を経験された方であった。震災時は商工会議所会頭だった。復興のため、人のお世話をしながら懸命に働き二年後に過労で倒れた。腎臓透析患者となった。

「プラス思考なら幸せになれる」と被爆者ははっきりと言う。外国人は被爆者が恨みやつらみを言うはずだと、また、原爆を投下した国に対して「謝れ」と言うだろうと思っているかもしれないが、そうではない。生きてきた苦しみを前向きに考えることが、周りの人への思いやりへと繋がっている。我々はしっかりしないといけないと勇気づ

おわりに

本文は二〇一四年四月十二日に開催された「軍縮・不拡散イニシアチブ(NPDI)第八回外相会合」の前日にNPDIが主催して行われた講演会時の概略を文章化したものである。六十九年に及ぶ核兵器不使用の記録は広島・長崎原爆被爆者の多大な犠牲と建設的な努力のもとでなされたものであることを忘れてはならない。

(平成二十六年六月二十日寄稿)

海外からの来訪者が 発信するメッセージ

—広島平和記念資料館芳名録より—

レベッカ・カダガ／ウガンダ共和国
国民議会議長



今日、全ての文明国とその市民は核兵器の使用に対して「ノー」と言うべきです。

六十年以上経った現在の広島においても原爆の恐るべき影響が見てとれます。

原爆の使用はいかなる理由を持ってしても正当化できません。

(二〇一三年十月二十六日)

キャサリン・アシュトン／欧州連
合外務・安全保障政策上級代表



六十八年前、広島の子ども、女性、男性が核兵器の最初の犠牲者となりました。長崎の人々は二番目の犠牲者となりました。

彼らが最後の犠牲者になるべく、我々の世代および将来全ての世代に責任があります。

(二〇一三年十月三十一日)

ジャン・ポール・コスタ／元ヨーロッパ
人権裁判所所長(ストラスブール)



ヒロシマは、未曾有の悲劇を経験した都市というだけでなく、人類の勇氣、存続そして復興を象徴する都市でもあります。アフガニスタンのように戦争で引き裂かれ破壊された国にとって、依然として広島は手本とすべき存在です。一九四五年に広島で起こったことが、決して世界のどこにおいても再び起こることがありませんように、また、世界が平和と調和の中で暮らせますように。

(二〇一四年二月三日)

クリストファー・ロヤック／マー
シャル諸島共和国大統領

一九四五年に広島に投下された原爆の影響および市民の方々が経

心が揺さぶられました。
心より平和を願い、それとともに人間の尊厳を望んでいます。

(二〇一三年十一月二十一日)

オマール・ザヒルワル／アフガニ
スタン財務大臣



験した苦しみをここ広島に来て学ぶことができ、大変恐縮するともにも光栄に思います。犠牲になられた方々に哀悼の意を捧げることができ、嬉しく思います。

(二〇一四年二月十五日)

オスカル・アリアス・サンチェス
／コスタリカ共和国元大統領



このような悲劇を繰り返さないように私たちは核兵器を廃絶しなければなりません。

これを実現するために休んでは

なりません。
これこそ人類最大の挑戦課題です。

(二〇一四年三月二十三日)

ローズ・ゴッテメラ／米国内務
次官

この厳粛な記念施設は、核戦争には決して勝者はいないということ、決して再び起こされてはならないということを伝えていきます。それゆえ、核兵器のない世界の平和と安全を模索するため共に行動しなければなりません。



(二〇一四年四月十一日)

広島平和記念資料館芳名録
(平成二十五年九月以降)より、
本年七月四日時点で掲載
許可を得られたものから抜粋
しています。